



稜鏡色別

二

リ 5
5011
2





稜威道別卷之二

總論下

神祕第一條 舊辭本辭差

上代古記典々稱號亦二種あり記一々舊辭古事と稱
 へ一々本辭本紀と云々舊辭古事ハ神代よりおし並
 て語を傳へたるものなりを以て本辭本紀ハ其中々
 里部を分て録せると稱せり即彼推古御卷亦天皇紀
 及國記臣連伴造國造百八十部トモ并公民等本記を録と
 ある右の舊事古事ハ中より一ヒトモ部に分て録せり
 を云々名目とも也次亦天武天皇十年の撰まると元明

5
5011
2

天皇七年の撰あはるるを其名目を省きしむるは是も
分て録さしむ古事記序に諸家之所實帝紀及本辭と
云まは撰録帝紀討覈舊辭削偽定實云云といへる那
とに合せしむるし抑つと上つ代も何事も神代より
かきり傳つたるもの事足ひ来はるとやむ漢
籍を見なると来て後ハ彼土の史記列傳あはる如く
一部は分て記さるは思ひなすしむる殊ふ
久し世自然の語を傳へたる古辭ふけ又自に談
辭ゴト此コト委ウチくクいイつツと云トもの添ヒはるル其カ聞ク乃ハ心コをスう
るルとありて其語傳の中より專事跡古實ふ用はる

實事のみと取分て録せらるるは本辭とも本紀とも云
ふ記此と天皇の御上ふて申さば即天皇紀帝紀なりと
あるは天皇の本辭本紀あり彼何れと語を總スベしむ
中より他事ハ皆除きて專天神より受傳へまはる天日
嗣乃皇統三種神寶等ユエヨシ由縁又御代より皇祖の御
上等と取わき録し申さば天皇御系譜なり次ふ國
記とある此ハ一わしむる名目の上ふるを只國々の事
等と記して後の風土記の類ふやともあはる記やう
なれど何れも書はる臣連本記より申上進て直に
天皇御紀と並べ出さふと名れば此大八洲ふわ

稜威道別

二之二

天地の分れり初ハツのり凡て神御國也故
又神の御顯繼ミアラレツキ古き事蹟等と録ヒくは有る
次ふ臣連以下の記等ハ各己オノカミ吾遠祖より氏々神別
皇別のともて官職等ハ未歴と記して即其家ハ氏
乃家記録系圖帳の類なり凡て是に准ふは又是
より家ハの記録ハ限らぬ大なりハ書等に
も當時ツノカミのみを舊辭なりハ録し法と本辭なりハ記し
状サとありて必其のりハ得ありぬる
なるにちやく中古ハ間カドありハ差別サバを忘れり
これ神代のりハ悟りてしはあり来しちあり

これハ今是と重みして此コトありあり其中ハ
此舊辭風と本辭風との二つありありのり
と事ハ率れて一巻あり出デ文次ハも多く出ツり
とけちあり多其大なりと云て止ムる

神祕第二條 古傳説本義

神代の古傳ハ皇朝廷スミラミカドのみハ私物なりハ廣く天
の下ハ語を傳へたりきそのりハ神代の時ハ神
より神を傳へ坐り國ありりハ國ハ傳へりてあり
人の代ハ始り廣くわらわる語を傳へたり
しかりとて然り押並り語を傳へりてのり

スラミコト 天皇尊乃御系譜の如ありけるも。天下ユダ舉て天ツ神の御
系統タツトミと尊重タツトミ戴ミき慕ミひ奉ミり来ミしミ徴ミふミしミ古傳説の正ミ
實シしく私シなき明證アカシありき其レが中レにも天ツ神國ツ神ツ御ニ
顯生ア繼ツ三種ツの神寶等ニの所由ユ天ツ日嗣ニの皇緒ニの御統ツき
なと云誰が身レにも仰キき貴クみ國ノの美事トとしてモ上下
普く語ヲ繼ベく又天ツ社ニ國ツ社ノの傳ハくモ其ノ齋イく人
く水家ノ子トむねと傳ハ。臣連八十伴ノ緒ノの職官ハ其ノ氏
々に專ラと傳ハけるが廣く押並テ傳ハたると。皆同ニ
旨ハして天ノ下に隱カる限ハく私ナく清クく明クく聊モ乖
けハぬモ天地相合ヒ上下左右一緒ニ真實トを貫ケる

神御國ノ明證アカシふして普天ノの下ニ尊キ極メ千萬ノの國
乃中ニ重ク限マなりける。故レ上ツ代ヲ必ズ知ラずと
はうれハるモとモ高キ卑ク押シて貴クみハん
まけるモあるモに人生トや物言ハるモにハあハるモと待
て先ツ此古傳ノの神語ト諳ラんニむルなりハありき
然ラう暗記ソぢキ幼キほトとモ天皇ハ天津神ニ隨フ
大座ニて天下ト無窮ハるモりハるモの臣等ヲを
興言セん萬代ノ服従ニ奉ル仕ヘべきノの官司ハ申スも更
なり下ガ下ニ至ルまデも氏姓トを世ニに傳ハるモおの
とモが職業ト堅ク慎ミ守リ假ルも上ニと僭凌ガと

るものや。天地は初發より定めありける。神勅の重く。
神習の正しき憲を知り。又神の靈徳と尊み。阿米乃
奇く。幽冥の畏きと懼む。して。隠して。悪き心と思
ひ。つゝ。持か。し。事の所以を。生涯忘れ。ち。り。と。て
が。然ら。語ん。ど。ち。り。来。し。な。り。け。る。か。く。て。ち。り。神隨乃
先。つ。蹤。ふ。ち。り。い。る。方。を。し。た。事實。ふ。就。て。誣。以。飾。ら。ぬ。
真。其。教。を。り。ま。れ。ハ。天地。ふ。徹。達。る。大道。と。ハ。稱。ま。る。べ。き
な。れ。故。古。事。記。序。文。ふ。即此古傳説を指し 邦。家。之。經。緯。王。化
之。鴻。基。焉。と。貴。む。せ。ら。れ。又。上。つ。代。の。人。々。を。何。事。も。然
ら。私。なく。先。蹤。の。正。し。た。事實。を。以。て。教。へ。と。ま。り。来。に

ち。れ。ハ。獨。私。の。空。理。を。説。き。空。論。を。言。を。性。惡。わ。る。と。し
て。甚。く。慙。思。へ。ま。り。う。ろ。萬。葉。に。ま。み。傳。へ。た。る。古。語。ふ
も。磯。城。嶋。倭。國。者。神。世。從。言。舉。不。為。國。と。ハ。云。る。な。り。然
る。に。此。國。に。教。へ。な。り。と。て。あ。う。け。思。ふ。輩。ハ。口。ふ。孝。悌
忠。信。仁。義。礼。讓。を。興。言。と。ま。の。み。と。教。誨。と。心。得。と。ま
ら。う。右。の。如。く。神。隨。の。大。道。と。守。り。忠。孝。の。類。と。身。に。行
ひ。て。議。論。せ。ま。る。神。習。の。貴。き。と。得。し。ら。ぬ。あ。り。な。り。又
近。世。の。古。學。者。恒。ふ。古。典。を。覘。み。ま。づ。ろ。本。吾。古。傳。ハ。教
乃。為。に。幼。語。に。な。り。と。ち。り。し。物。と。云。ら。や。依。得。悟。ぬ。心。ら
ら。此。國。に。教。へ。な。り。と。云。ら。る。を。窮。し。う。り。て。他。國。を。國

うらむ悪かるゆえに、教へあり。御國ハ國がら正しく
人乃心直ナホうれハ、教ふる及バざりし也。なご云、ちうへ
るそ、いそゆは負と、みたり。唯其、教への穂うれるのみ
ふこそあれ、又世ふ吾、古傳説と、文字無、して傳、是をも
疑ふゆるも、天下の語、い言と、ちうしと、ちうね、心を
既く或君、余ふ問、冷ハく、吾恒ふ疑ふちあり、彼、上代の
長き事と、口より、口ふ傳へ来ぬるも、いにも心得
は、人も我も、幼稚の時、素讀と、ゆる、大學一卷といふで
も、諳記と、一人をきう、寺院の沙弥等が、日杲に口誦
ちうらふ、佛經一卷と、諳ソラヒで、いちハ、猶、いさうしと云

古ハ彼、舊事を傳へ、いふ、然カま、イタツ勞く、いれ、ものとも
おほるぬを、いふに、と申、いへるに、答へ、ちうらく、
世に覺ちるゆると、覺ちるゆると、の、別侍ワキ王、自然
のちハ、おほる易く、人作の事ハ、おほる、いさし、又事、實
乃ち、いそ、おほる、いそ、空論、虚事ハ、おほる、いさし、皇、大
御國の先代、舊辭ハ、自然、い傳へ来、其が、即、天皇ハ、御
系譜、神及百官の本縁、國土ハ、来歴に、い、何、是も、實事の
みたり、いれハ、おほる、易く、いれ、いそ、彼、漢籍佛經
乃ち、いそ、い、人作の、寓言、空論、設言、なる、い、い、人の心
ふ、留、い、い、オボユル諳記、い、い、い、侍、い、い、

さして口づかう語る世まはさばうのおゆるや
かりし古傳説も今の古事記日本紀などの如く既
尔書籍となりしうへにてを猶儒書佛經等にか
らるるも侍らば其を事ハ實事あれども書籍と云
もの自然なりぬるに文章と云人作に率れて
實事が實事ありて虚事と同じくおゆるれを成
ゆくなり此差りをもよくわらうりせ給へ
そとくかゝの殿ハ舊家に坐して二十代も連綿せ給ふ
と承るぬ其御代々の御系統御支流又中昔以来戰
場ハ御勝敗御危難御領地の増減等の事どもあり
阿はれもおゆるおゆるん又舊臣等ハ武功戰死忠
不忠又其人ハ姓氏素性等も大なる事ハおゆる居

給はん其おゆるおゆる限りの事どもを文に綴り
筆記とせて試し給ひ三卷四卷ハさぐりなん又舊
臣ハさぐり家とふも各其々に傳へたる侍なん其を
悉く書とら給ひ其も又二卷三卷ハさぐりなん况
や文字と云ものと憑り言傳へに馴らるん上つ代乃
人のさぐりや今世ふても盲人なり記曉殊ふけ國
土打始め神の始め天皇ハ御系譜の類ハ何れも尊重
おゆる極なりなれば天下の言継ふして遂に幼語
やゝ成來にすれば應神朝までハ八卷さぐり乃
るハ只自然のわざにして君が御先祖の事をたふる

吾孫に何うハコト申さんと白んときた
殿君手を拍上りて、
吾孫やまて今迄如此の明弁をきうは是を聞て、
れし思ひあつて、
ハ古戰場あるを墳墓あるを由ある處を問せし、
其地の民出ておよそ鎌倉將軍の頃よりあつた、
はまかより来しり上を、一に答へ申れ、其詳は
なると年月までもたどらばあるあつた、
て其ハ何れ記して然う委きごと問せしに、皆一文
不知の山賊あり記し物の有て、
只昔よ

ていれ繼か、
さうゆめと申れ、此申れりとも、
むうそれ巻數ハあり、
實れ在のま、
て諳記とんとを思ふ、
人作の經卷な、
曉ら、若此論し、
員に入、
の、まひつ、
君れ疑ひ、速に然う解、

なんとうして引つ

世ふ此、理を悟らぬ者。上古あは、一種の文字ありて、傳へしうり多しといひし説ふ據り。近世神代文字と云を、作ら出た。人を惑りしる者、そのりう。その作れり字、そのり抽出よ。又其、設けしる説ともわらる。うらよ、既ふ古語拾遺、序文ふ、上古之世、未有文字、貴賤老少、口口相傳、前言往行存、而不忘。書契以来、不好談古、そのりい。又一、卷ふ引つる。日本紀、私記ふ、本邦上古無文字、口口相傳、云云と記しし。共ふ十歳以前、の古傳なるを、いひ証とも言曲るる能ハありやハあるとき、其偽者ふ問試ししに、偽者云、其字ハ思兼、命狹男鹿、肩骨を以て、制し賜るる也。と云、其を何等の書に傳へたるをぞとやふに、多し隠れしるそのり云て、一も物存やけある答へぬし。故、戯れふ問、然ら

尊き思兼神の御制作の文字しも、卑き異國の凡人乃字に、おおとれて、絶つといふ。却て御國に耻ならんを、といひつるふ。つらくありたるも、きしうし。そのり野國ふも、名物ハあり。字ハたよ。漢國の名物ふして、便しき物にし、あれハややくらうし。を名して、用ひさせ、そのりあれ。何れあつぬるを、あらしん。か、らおよづれと云、出る徒ハ、皆前條に云、るを、ありを悟らぬ故なづ。凡てのりにも、虚妄を以て、愚らぬる人と惑りし、神の罪人ぞらし。

神祕第三條 雜言談辭辨

古傳説の幼語と成来しこと。往古みしこと。のや貴く、後ふとりて、人の疑ひ惑ふ、病とそらうに、其

とるばるの尊き神語の中に物もつれき稚言多く入
ましむ。又あまぬ談辞添言カカリゴトとあり。あまの加えり来はし
む。幾代の間いくつれ人う。拘泥眩惑来はるんうし
又適他ヨウなう。加えり見らん儒者法師が徒ハ。阿
那畏ナカレて神奇鬼怪作物とし。つと恐くおつけなく。
其作意拙しなやとけん。いんそそりう。あまれ古へ。寧
樂朝の間ホドまでハ。神典ホドの奥旨と不知かりつるを。是上
がに此間ホドまでハ。遥うに以前のうありくれど。ゆを
皆うも失るん。本傳と稚語と談辞添言等々差別ケガレを
うりのうハ。あまのけり。と名をて。深く惑ひし人も
名をけり。山城葛野地ふ。大宮遷とれて。二代三

代経るるあまに。國もつれり。人の代も加えりて。い
く古傳の本意と失ひ。神語の微妙ウツクシれ。靈異ウレヒと窺ふ
為便スバふらに不知かりにう。其を嵯峨天皇弘仁以下
の私記等れ説の。俄ふ拙く成つるを以ても。知へし。况
て其レ後ニも。己が好ムところニに淫して。儒ふよろそ
れば。佛ふ出テ佛に出されハ。陰陽師道家の説等に。附會
せさるはあし。又近世古學者出て。其附會ヲつしうど
も。議したるを。ふりなれど。猶此稚語談辞ヲつて
深く溺惑シひて。彼邦家之經緯と。詔スし。神典ヲも。
禽獸魚虫の所謂赤本の怪談と。つて。説腐キクダし。と
物言モノコトなう。

そあまのまゝにうたへたるを、たゞて然らば怪しくとらふし
て、其説の幼く癡々しくなりゆく毎ふ、是を疑ふを、漢
意ぞと、強らに抑禁むる。其ハたゞ人ハ本傳と、談辭
とを、一に混ぶて、或ハ御胎より國を産みよといひ、或
ハ地底に、黄泉と云、醜穢き國ありとして、貴人も賤人も、
善人も悪人も、死バ皆其國へ往、悲しよる也、なく云る類ひ
の多う。誰う疑ひて得あらん、彼漢意と云るや
も、無事けあつれど、大うた人の、只少し書よむば
うらたると、然らば、古へ遣唐使、留學生なやにて、
彼國ふ、久しくありむ人たりたるハ、何らうのたし。

其、留學生より、彼土に成長し、山上憶良、大夫歌ふ、虚
見通、倭國者、皇神能、伊都久志吉國、靈驗のあり、ありに
なり、云云、今世能、人母許等期等、目前、見在、知在、其靈
隠れ、しるすに、あつれ、今世の人、も、皆悉く、目前、正
しく、え、し、り、又、慥、山、聞、傳、へ、し、り、て、よく、知、る、る、を、
と、云、云、な、や、よ、み、て、い、や、あ、る、る、に、神、と、尊、み、古、傳、と
信、じ、け、る、是、の、み、あ、あ、ら、ら、猶、萬、葉、に、も、國、史、ふ、も、此、類
ひ、多、う、る、を、又、あ、つ、め、て、當、時、あ、つ、め、此、神、語、の、心、得、と
ま、有、ら、む、る、を、想、ふ、し、し、ま、て、其、心、得、様、と、ぞ、即、此、度、許
れ、五、箇、條、の、神、祕、な、り、な、れ、ハ、此、神、祕、を、貴、み、戴、て、神、典、の
真、の、旨、と、今、こ、ろ、今、世、に、お、弘、む、ら、き、時、の、来、向、ら、れ

ば其詳うたゞるを次に論まふし茲も先づ幼言と
をたゞしへば生素或鳴尊常ヲナキイサ以ヲ哭泣ナキイサ為行ト一書曰常ナキイサ以啼ナキイサ
泣チフツクム恚恨ヨクキキクム常ヨクキキクム好哭恚ヨクキキクムまゝ吾欲アハクノクニネンクニ從母於根國ニカラントオモヒテコソナクナレ只為泣耳
なとある此等ハ兒チコの母を慕ひてよく常に泣くやあ
るふ對して語るも〜〜辭ともあり又次ふ生蛭ヲ兒ト雖ト
已三歳脚猶不立ミトセニナレアシナホクある便チ載葦船ニ而流之ナカレヌツ
步行アリクと急クに對へ且ハ懦弱ヲヤナク云クうんちを棄チなると
云古クは警シもあつ〜
其チ中ニ葦船ハ古クは稚子ノの
の釋ルふ云クまゝ少彦名命ノ段ハ有ク一箇男ノ云ク隨ニ潮水ニ以テ
浮到カビキヌ大己貴神ノ取置テ掌中ニ而モテ翫ソビモフニ之則ニ跳ヲトリテ齧カキ其頰ヲ云ク云ク
兒童の物とを奇キと好み小チき物を翫メる心クくせれ有ルも
の故ニふ其レに合ヘたる辭也まゝ陽神ヲカミハ左旋ヲリ陰神メガミハ右旋ヲリ分レ巡テ
國ヲ柱ヲ同會ニ一ニ面ニあを稚子ノ遊アソビ戲ル物ヲ中ニ置オき左右
より分レ廻リて行會フとき互ニに良クと見合セて婆阿バアと云ク
まわあつと摸カせらるり會ニ一面トと云クる素素或或鳴尊
昇ユス天ニ之時ニ溟渤ウナハラ以テ之ヲ鼓盪トヨミ山岳ヤマウケ為リ之ヲ鳴响ナゲまゝヲ拔テ十握ヲ劍ヲ
倒植タテ於地ニ踞アガム其鋒端ホサキニまゝ以テ千人チヒキ所引イ磐石ハ塞メ其坂路ヲ此
等ハ幼稚キ者ノ勇猛タテしき態ヲ好ムむ合ヘちる添ハ辭ヲ
としかり又保食ヲ神段ヲ小頂チナレリ化為牛馬ニ顛上ヒタヒノ生粟ニ眉上ニ生
蠶眼ミユ中生ニ釋腹ニ中生ニ稻陰ハトニ生麥ニ及大豆小豆ニ一書曰生ニ稚ワカ

産靈^{ニムスヒヲ}此神^ノ頭上^ニ生^ヒ蠶^ト與^レ桑^ト臍^{中ニ}生^ヒ五穀^ヲまゝ素^多鳴^尊段
尔^乃拔^テ鬚^ヲ髯^ヲ散^ラ之^{即成杉ト}又拔^テ散^ラ胸毛^{是成檜尻毛是成}
极^ニ眉毛^{是成椽樟云云}斬^テ軻^遇突^智命^為五段^{云云}之^配
る^條も此類也^{云々}幼^者は常^に目^鼻口^尻等^に配^テ
て^物も^さる^るに^合へ^たる^文あり^る不^須也^云
目^汗穢^之國^云不^須也^頗頗^山目^杵之^國歟^云
凶^目反^りて^今も^稚子^等の^物と^棄ふ^不須^也と^記目^の
下^へ指^と刺^入て^暍と^反し^て赤^陪以^と云^是也^云伊
肆^諾尊^拔劔^背揮^以逃^矣云^云後^手投^棄與^之
之^貧鈎^云云^言訖^則可^以後^手授^賜云^云此^等

も稚子等の恒ふよく為める形容に云移せるよて今
世ふも為る態なり此類猶ほ多しれと本文の釋ふ
出さるるハ省きつ但記傳釋ふ泥みて疑ひと貽さん人
の^ゆり^に古^事記^の方^とも^少し^採て^云へ^し先^づ國^乃
名^ふ愛^比賣^飯依^比古^大宜^都比^賣建^依別^白日^別豊^日
別^{なり}とある

此記文ハ本宮中に傳へたる舊辭なりけれハ皇子
たち^に當^りる^る多^し又^凡て^の上^も談^辭の^多
う^る是^も宮^中に^語り^聞き^る人^のあ^らう^る故^{ある}
へ^し又^此類^書紀^の一^書に^皆各^別な^ると^合せて
その^うみ^兒等^が伽^ふ語^りき^くる^人の^心に^あら^う

取、添ふむらむらととも心得おとくし。

此を上つ代わ御子なる御名ふ某彦某姫某別なり

稱多うりける故ふ其比へて語る也其ハ幼き御

子等に某國某嶋とのみありて耳疎うりける故ふ其

皇子たる御名に通ひし耳親く記安うりて

也まゝ生國やあるも生れ出てへく聞しありける

等たりて是も耳をきし九語を辞なりとれハ兩兒

鳴三子嶋まゝ身一而有面四なり云ふせ

いと多うり故自り幼言もあふ又其國々の

有ける其例ハ本文の釈引し云へし建日向日豊久士比泥別皆如

此あり記傳ふ是と肥國のと殊ふ恭々しく長く稱へ

亦名ふ改了る私事なり故ふ則其御子等の中に御位ふ即

せ給へる太子尊は尊稱えしなり是ちやく皇

祖神の日向國に大座をける間よむ舊辭なる故ふ

取わき其國と崇り稱せし一つの證となすきものに

そある是よりハ遙み後のうりて倭國亦名をゆ

氣多之前菟段あふ手間山赤猪段なりと云上古の

一の幼話なり也今も國ふりてハ彼素まる蟹貝

比賣蛤貝比賣段なりと云兒女の遊態とらつて云る

古事也舊事紀の傳へ又氷目矢段或ハ蛇室吳公室段

をくも、男兒の耳と驚うしりんとて、其文也。鼠言
ふ。内者ウチハ富良ホラ富良ホラ外者トハ須夫スブ須夫スブとあるは、直チに
稚子の言種コトガサよ。今も云々なり。又疑コトと許表コラ呂伊佐ロイサ
都と伊佐イサ知流チルなりと云るは、兒の未、舌はよくも
廻モトらねむ。片言は遺ユヰまじり。又伊邪那岐命の黄
泉ヨミより還マシらせ給ふ途中の物ふ。蒲子エビノミ。今所謂イハレ 筍タケノコ 桃子モモ 子コ
と皆稚子の賞メツるものなり。又大オホの似ニおれき方
をオキ除ノゾク。怕オソしに物は、眼メの比ナカふを。八岐速呂智ヤチノチふも。紀
をメ核田彦クサノヒコ、神カミふも。赤加賀智アカカガチと云る。此コを兒の恒トコふ口に
含クハみ鳴ナして、よく見知れる物なれば、あつて、中昔後

酸醬ウヅキと云も。頬衝オウキの義イミふて、彼、口クチ子コ含クハて、春ハルが如ごとくして
鳴ナれ、より云、語コトなり。又年久實トシクノミ。今も偏土の兒ハ賞メツて、羅カ
摩マ葉ハ船フネなど、何ナニも兒の愛メデ罷マふ物等モノトナリなり。又天若日子アメノワコ
段タビふ。河雅カワノリと云、けり持モチし。雉キキと哭ナク女メと云云。又後田
毘古ヒコ、神カミ段タビふ。渙スナトリして、比良夫ヒラノカミ貝カミに、其御手ミテと咋クハ合アハせられて、
云云といひ。又其、溺ノボて沈シヅみ給たまふとき、底ソコごとく御魂ミタマ都夫ツブ
多都御魂タタミタマ阿和佐久アワサク御魂ミタマなり。何ナニも。凡オホ、如此カ禽獸カニ魚貝イシ等トナリ
を、幽冥ユウメイの事を語コトる言ハ猶、幼童コドモに語コトるとて、の、辞コトども
なり。此外ソノトモなれば、類タガは、草木クサキ禽獸カニ魚イシ鼈カメ虫ムシ貝カミ等トナリの名、上卷ウヘマキを
うりに、四十七シジュウチ八ヤチなり。六ム七ナナ十七ジュウチ有アルり、又オ葡ク葡クし

足どりし。尿し。尿まうし。吐し。唾し。など云々をいひの言
乃多うふも。兒の恒も。わごふれ。示し。か。う。に。添
た。辭。も。し。ち。う。り。又。五。躰。の。内。處。も。多。う。に。尿。と。云
こ。や。十。處。陰。と。云。こ。や。是。も。上。卷。ど。う。り。に。八。九。處。を。え
こ。う。故。尔。如。此。慎。し。た。處。を。あ。よ。り。取。出。云。も。か。の。お。や
ろ。し。し。ち。う。り。お。く。つ。け。ま。う。可。笑。こ。や。又。打。と。け。う。や。お
か。取。合。せ。て。夜。の。寢。所。の。目。覺。種。ふ。あ。ご。と。設。け。し。る。附
こ。ん。言。ち。う。り。し。此。類。は。猶。あ。ご。と。本。文。に。其。處。に
も。云。べ。く。れ。ば。只。其。大。概。を。引。つ。て。し。る。に。其。言
爰。に。又。談。辭。と。は。古。へ。此。古。傳。説。と。語。を。傳。ふ。に。其。言

の勢ひふをいれ。か。ま。に。因。て。自。然。ふ。ち。う。り。い。ひ。添。ら
る。辭。を。云。

此と中古後の詞ふ比喩てつら。土佐日記正月九
日。大湊を漕ぎれと行とこら。女文に。かくて漕ゆと
るふ。海はほとりにや。あ。る。人。も。遠。く。な。り。ぬ。船
乃。人。も。見。え。れ。あ。り。ぬ。岸。に。も。つ。ふ。り。あ。る。べ。し。ふ。ぬ
ふ。も。た。あ。り。あ。れ。ど。う。い。ふ。し。と。云。此。詞。の。中。身。
舟の人も見えぬありぬと云ハ。岸に立て見送る人
女詞なれども。こ。ま。あ。ふ。人。も。遠。く。あ。り。ぬ。と。云。文。の
勢ひふはよて。い。ひ。入。り。也。又。廿。日。の。夜。安。倍。仲。麻
呂。の。子。を。語。れ。る。條。に。お。と。海。原。ふ。り。さ。け。る。れ。ハ。云。云。
と。そ。う。り。け。る。か。の。國。に。人。聞。し。る。ま。ど。く。お。か。え
た。れ。ど。も。こ。ま。あ。り。を。男。も。ど。い。に。こ。ま。を。あ。つ。て

うれ出して、ちりけ言葉つしんきく人ふいひきく
せきれハ其くろそや聞得しりきむいしおひん
のほにんんきくけし此文にちりけ言葉はく
たゝ人とハ今云通事のゆなれど、ゆ時ふき人
乃居べしあはび仲麻呂主るそ、あろこしに久し
く在てよき通事なるべきと、然う取そへて七云
るを、世の人に示しそ、け辞なり、又伊勢物語六段
ふ云云神とんつと、うあうなれハ、あばうなるく
らに、女をはおし入て、男弓やれふいとあひて、戸ど
ちにきりちや、あけあんと、おひんつあう
けふ、鬼一口ふらひてきり、あはやといひきれど、
神あるさあきに、えきうあうきり、やうくあてあけ
ゆくは、あれハあて来し女もあし、きりきりしな
く、ども、ういふし、此文に、女れうせしるきは、鬼一

口ふらひてきり、と云るが、即談辞也、殊あこれハ、次
文に、御せうと、堀川のあや、云云、うらんとあう
うに、いふしうなく人あ、をききく、とりて取
うし、あひてきり、それをかくあふと、いふなり
とあれハ、彼上文ハ、皆が、談辞なり、猶此類ハ、物語
書等にも、いふ多うれと、餘ハ、准へてきりへし、是、今
世に、話といふもの、いさゆる、道行に、古傳説
も、やがて、上古に、實物語なり、故

其^カ状、い博く、さあ、次々云ふし、これハ、右の
幼言も、此談辞の中、一つなり、きれど、幼言なり、ぬも
多うれハ、姑く、分るは、あう、此紀ふを、漢文の中に、持ふ
おひうり、先、開卷に、古へ、天地未割と云ふ、神聖生、其

中馬と云るまがれ五行ハ漢文にて副たる談辞なり
然う添々故ハ此の古傳説ハ國土成始を主と
傳へ來る渾沌の初傳の無うけりまに漢藉ふ
るをいふとを取舍せり潤色たりに添たるま
りなり此類ハ既ふ云孝徳天智朝の頃あり頻りに行れ
てし譯文は横流せし餘波ありしなり乾道獨化所
以成此純男ま乾坤之道相參而化所以成此男女ま
と云類ハ其條の註たるに加之たる談辞なり凡そ
如此とよにきりやうに隔りて取放てるは
い得心得安うれと今一種ハ其處の意を察へ故ふ

の物語風子語を統たる紛ハた也まれどそれと
今かく談辞の意趣を一きいひしり上を其心
しそをもてゆきげ本つ正傳と只語をいしり差り
おのぼりしゆめきまありたりハ伊弉諾尊
伊弉冉尊立於天浮橋之上と云るも曰水沫凝而成也と
ある訖れゆや長き一段ハ皆談辞なり其上文
乃七代段ふ合れハ既ふ彼段に出る國土の始は
るを此二柱よ委ねけり再ハ兒童のしり註釋の
如くに語るなり物と云るはやがて知れゆ類ん
なり又素戔嗚尊の八岐大蛇段なり唯彼地ふりて

害_レ人_ヲ大蛇と亡_レてけ_レず神劍と得_ルせ_レ終_ル人_モ即
其神劍と天孫の御守護_スとて天照大御神_ヲ御所_ニ獻
終_ルて己_ノ尊_ハ其國の清地_ニ留_リ坐_シ奇稲田姫_ノ命_ヲ御妃
と_シ御子_ト云_ク神等を生_ル終_ル黄泉國_ニ入_リ終_ル
や_レ云_クのみけ本傳_ナりけ_レと今の本文_ニ如_ク語_ルあ_リ
来_シし_レも有_レけ_レ此類_ハ殊_ニ多_ク上_ノ御誓_段天石
窟_段下_ノ中國_ニ和平_段大己貴_命段皇孫天降_段等皆准
ふ_レ又_ニ甚_ク打_レけ_レ汝身_ニ有_レ何_ニ成_ル云_ク有_レ一雌
元_ノ之處_ニ云_ク吾身_ニ有_レ雄_元之處_ニ云_ク始_ニ邁_合云_クま_ル
一書_ニ云_ク以_テ吾身_ニ陽_元合_ニ汝身_ニ之_陰元_ニ云_ク遂_ニ將_合交_而不

知_ル其術_ニ時_ニ有_レ鵲_ノ飛_来搖_ス其首尾_ニ二神_見而學_之即得_テ交
道_ヲ云_クた_レや_レあり_又む_クけ_レく_レむ_レる_レし_レぎ
黄泉_段小_ノ膿_涕虫_流ま_ル脹_滿太_高上有_レ八色_ノ雷_{イカ}
泉_津醜_女人_云云_クま_ルの類_ニなり_まる_レ所謂
八雷_者在_ニ首_曰大雷_在胸_曰火雷_在腹_曰土雷_在背_曰稚
雷_在尻_曰黑雷_在手_曰山雷_在足_上曰野雷_在陰_上曰裂
雷_之名_上け_レ八色_ノ雷_公尔_再し_レ作_レ名_と加_フて_レ談_辭と云
こ_ノや_を論_シた_レ也_故此_レ作_レ名_各作_レ意_{あり}ま_る乎_{本文}乃
釋_ム云_クと見_べし_まる_吾當_ニ縊_殺汝_所治_レ國民_日將_千頭
云_クこれ_も右_ノ類_也ま_る有_レ大_桃樹_云云_ク因_ニ採_テ其_實以_テ

擲雷者ツラシメタマハ雷等皆是走。此用桃トモ避ル鬼ヲ之縁也。云々彼作意の
雷トモふ。桃子トモの避ル鬼ヲてふ古き一ツの世話ヨカタリとそへたるあり。
此外かやうに何事の上ふも其由縁ユエヨシを構へて云々。紀
記中一部にわづらひて尤多うり。此類ハ後物語書にハ
ちゆる冊子地チヨル辞ジと云ふ似て。語る人の自ラの詞コトれふを
かり又或ハ其前文に義理を付そへ釋シヤクを加へたるこ
ちねらもわづらひ其ハ多とへば生日ニヒノイ神カミ云云是時天地相
去未遠クハレタ故以天柱アメノタテ舉ト於天上アメノタテ也。まゝ磐長姫云云。此世ヨ人
短折ミダシ之縁也。凡此等以て總トての上とも准へつゞし。此
等のたゞを神代卷のみふ限らば神武卷以下も多

うり。されハ記の如く省る文。中には秋山之下氷壯夫
春山之霞壯夫ハルノカミと作名して云々類タガひもあるもつゞし
なり。もつゞし如此状カクサマなる附ツケそへるカと今談辞カタリコトと名ナるよ
し。此紀コトよも談カタリと名ナる古事記コトも神語カミノコトと名ナるカり。
歌ウタも付記ツケ上卷ウヘノマキ八千矛ヤチチボ神カミ御歌ミウタ母ハハ夜知ヨチチ富許トモ能ノ迦カ微ミ能ノ美ミ
許コト登波トハ中畧ナカノリヤク許コト登能トハノ加多カダ理リ碁ゴ登母トモ許コト遠トホ婆ハ事コトの談カタリ辞コトよ
は。やあると始ハジメて次の沼河ヌナガハ日賣ヒメ御歌ミウタまゝ須勢スセ理リ毘賣ヒメ
命御歌ミコノミウタ前後マエノチノチ五イヒ猶ナホ其ノ末ノ朝倉アサクラ宮ミヤ段ノ三重ミヘ姝メが歌ウタに至いたる
まゝあつと出デつと其ノ等ノ歌ウタハ正ただしく其ノ神カミつと其ノ賦ウタ給たま
ふと云にも非あらず只上ウヘ代ノり世ヨの談辞カタリコトふ語コトを傳タテマへけ

さるるに語ると云々を當昔樂府にして歌ひくる
時其辭を少し活用して謳ひ傳へたるなり此事ハ言
別の方に
委しくもさるるに記八千矛神段右の御嬬ミツヒよりして
八十神のこや黄泉のつらと長くと語を續けし其最
終ハ此謂神語也此神語二字と記傳本新本等ハカミ
ゴトと訓たるハわろし今ハ古訓を
引とけこやわれをさるるも舊辭風の傳ハ如此何
くらとさるる煩うれば然る幼言談辭等を除
きたる本紀風史あつたやと誰も思ふべきと文人の
手して物さる時ハ其害却て彼談辭添言等より甚
したる既ふ上卷に言ほるる如くなりされば

記序云潭探上古心鏡煒煌明觀先代於是天皇詔之朕
聞諸家之所賚帝紀及本辭既違正實多加虛偽此ハ既
ム引て云るガ如ク彼談辭を
除きて漢文して録せると云當今之時不改其失昧經
幾年其旨欲滅云云故惟撰錄帝紀討覈舊辭削偽定實
欲流後葉と詔ひるも偏ふ其詐偽私事と嘆うせ既
ひてなりを又古語拾遺序に自文字不好談古
浮華竟起とも云至所詮漢文ふ移しつる本の正實と
傳へむくや難うなりん其上に昔も今もかろぬを
人情にて然う家々に本記を作らるるれば互に己
が氏祖と稱揚他の職省を以り貶以類の私事多く出

稜威道別

来^ルべし。た^とへ^バ中臣氏ハ。大伴氏と貶し。忌部氏。彼。浮
華^ヒ競^ヒ起^ルと。嘆^キけ^ル其^ノ人^ノふも。訴^ハ状^ヲ表^ス。中臣氏と。強^テ
い^ハ貶^セず^ルふ^しく^レ。これ^ノを^以て^も。想^ヒや^ル
い^ハか^レば。彼。本紀風^ノ史^也。ふ^らに^遺る^らし^に
は^あり^し。中昔^ノ國朝書目^{一冊}と云^ハに。皇帝本紀。世紀
本^ノ辭^ナと載^セれ^バ。其^ノ間^{ホド}も^少バ^存け^られ^ども
彼。私事^ノ多^クり^きん^うら^人用^ヒる^まに。絶
し^にこ^そ。今^も關^本な^らう^{。舊}事^本紀^中ふ^ハ。少^しづ^く
遺^レる^ら。又^後の^筆ふ^ハあ^りと。天^言な^とも
本^辭風^此を^想ふ^にも。天^下ふ^廣く^語を^傳へ^{たる}古^辭
あ^ら人^{一箇}ノ^私事^を加^ふる^らあ^らハ^ば。幾^代歷^ハ

了^も。神代^ノ本旨^を失^ハ果^テる^ら。貴^キな^らう。是^をも^も
御慮^らし^し。淨見原^{。天皇}ノ^大御心^ぞ。や^がて^神ノ^御心^ハ
あ^ら。い^しく^し捧^くへ^し。其^らの^幼言^談辭^を
用心^をて^ハ思^惑り^て道^を失^ふへ^し。

神祕第四條 略語含言大概

古文と云^ハもの^を今^ノ人^ハ物^を書^付る^状と^も。同^トう^ら
ら^ん。前條^ノ如^ク用^キる^らを^も。いと^長し^と謂^ふら^んと^想
は^ら。又^用あ^らる^らを^も。い^しく^省る^らも^多う^と。此^ハな^らぐ
て^の世^がう^らなる^ら。代^をも^{。此}古傳説^ノ大旨^を誰^志
ら^ぬ人^も無^しう^らつ^らう^ら。い^しく^省き^ても^{。聞}ひ^がら
び^りし^らる^ら。且^ハう^らい^しる^ら人^ノ心^ハ

廣きなり。後世の今にしてを、彼用なきなり。多くそい
ゆるにも、人あまた感ひ、又用ふるると恒ふ者なり。も
人おかく感ひあらう。ちりにそ例と一、二つのも
彼御國依ニクニヨサレの神勅ハ、高皇産靈尊、神皇産靈尊、天照大御
神、うちよむ大命なるに、あるを高皇産靈尊、一柱乃
み舉て、天照大神と省き、又天照大神一柱を舉て、高皇
産靈尊を省けり。此、中に、高皇産靈尊を省る方ハ、姑く
ちりも有べきと、天日嗣の御上に就て、天照大神と省
る方々、古文ハ略法をぬ人の心みけ、やがて疑ふぬ
也。猶、いづれ、初りふ天之御中主尊を舉て、古事記も、

此紀ふも其大神の御事と再び申さるも、皆皇産靈と
稱ナリふちりて、畧けるなりけり。

御中主と、皇産靈と御名の上を異なれど、其大御靈
ハ、何とも萬物の御靈異におちりぬ。然う相カネ包
て稱シ習ハハ、也。ともれくて、天地の太祖、大神と、除
き奉るべきにあはれ。

そとく此御國依に就てを伊弉諾、伊弉冉、二柱尊の大
命も無くてあるべし。ぬれぬと其も申さ
ぬ。是も省きくなり猶、いれそてゆうけ神世五代十
代の大神等ハ皆悉く皇祖にありてせげ皇御孫尊の
御上り付各モロトモ一同ふ大命あるべきなれど、其餘毎に五代

代十七柱、神たちれ御名も、擧がられぬとあれハ、祝詞
ふけ神漏岐神漏美命乎以天とを白せるなり。これハ
此紀の上ふも、恒久高皇産霊と白せる中に、神世五代
の太祖と相包まも伊弉諾伊弉冉と白せる中に、神世
七代の皇祖神と攝しと、終みけ、其二柱とも又省き
て、天照大御神御一柱ふあり兼又あるは高皇産霊
尊一柱ふ、委ねうけて省くるも、譬へハ、初の國修理の
大命ハ、七代、神等十二柱ふ係りたりと、最後の二
神ふ委ねうけしなり。同例なり。又御誓段
の一書ふては、天照大神の物實と、素戔嗚尊の物實と、

互に混ひしり如く、しありて、さそ皇孫ハ、素
戔嗚尊の御胤ふやと後世人の疑ふは、うりなりも
あり。あまうりに省きとくせし故なり。これと其も
天照大御神の御物實が皇孫に坐し、とそのうみの代
みは、堅固く定めて誰うう人も、あまうりしり
然る省るなり。これハ、其も、しそえありてゆき、其も、
すが、く分れ、しり、惑ふぬ、あり、あり、其、處
乃釋とる、と、あ、べし。

昔より書紀の註あり、あまうり、これを取、う、人、又
近世宣長の鬘華山蔭あり、皆引出て難じたりなり。

特ふ古文と知らぬをうらや也。此外通證集解等も惑ひ
しり神代葦茅也師説ふ泥して謬也。

又國事趣段^{クニコトムケ}ふあるを經津主命一柱のみとあげ。又を
武甕槌命一柱のみと擧げたるも元より此事趣^{コトムケ}
を二神相並^{ニカミ}はし^{ハシ}ものせざるは^{ハシ}に定^サりてあり
ほれハ更^マふ並^ナふも及^キばざるもして一柱^{イツク}
出^デせるほがある但^レ此^コを他の省きとせ少し異なる所
あり此二神の御名ハ經津と申れも御劔の稱号甕槌
と稱^ナれも御劔の稱号なりあれハ一柱の御名を申せ
ハ今一柱ハ御名も白^シり^ハれ^ハ一柱を擧て二柱を

兼^ナれハ殊^トふうけむりて省^スるにこそ

記^キふはち^チり^リゆ^ユり^リを^ヲり^リる^ル建^タ御^ミ雷^{ライ}命^{ノミコト}一^{イツク}柱^{ツク}と擧
て經津主命と省きたり是に惑^レて記傳釋^シふは經津
主^{ヌシ}を建^タ御^ミ雷^{ライ}の亦^ナ名^ナと^シて別^ワふ香^カ取^ト神^{ノカミ}と^シてな^ニ
た^ニと^シ云^フるハ甚^シしき^ニひ^ハら^ハる^ルぞ^トう^シ

此外省^スき^ハし^ハ合^ハれ^ハし^ハせ^ハる^ルゆ^エを^ヲあ^ハる^ルに^テこそ^ハ盡^ス
け^レん^トも^ハあ^ハる^ル此^コ心^{ココロ}し^ハて^ハよく^ク本^{ホン}文^{ブン}を^ヲな^レて^ハ吾^ガの
道^{ミチ}別^ワの^ニ釋^シとも^モ疑^ヒひ^ハる^ルう^ラと^シて^ハ其^{ソノ}大^{オホ}切^キと^シ
採^ヒて^ハこそ^ハわ^カり^ハあ^ハる^ル此^コハ^ハ猶^{ナホ}記^キ紀^キのみ^ミも^モ局^{カギ}に^テ
古^コ文^{ブン}の^ニう^ラづ^クハ^ハ大^{オホ}う^ラ此^コ状^{カタ}なる^ルもの^ハこそ^ハあ^ハる^ル故^ユ
と^シて^ハ再^{マタ}親^ミし^ハき^ニ大^{オホ}被^ヒ詞^ジを^ヲ以^テ一^{イツク}つ^ツの^ノ彼^カ詞^ジの^ノ發^{ハツ}

端^ヒ、領^レ中^カ挂^ル伴^ト乃^ト緒^ヲと云^フ、次^ニ伴^乃緒^と云^フ、
六^ツ重^ね、又^ニ高^山能^未短^山乃^末と云^フ、再^ハ出^シ、
荒^潮乃^潮の八^百道^乃と云^フ、章^ニハ、鹽^と云^フ、
あ^まる^カ疊^ね、中^もも^も級^戸の風^ハ、天^の八^重雲^と、吹^放
つ事^ハ如^くと云^フ、次^ニ朝^の御^霧云^フ、大^津邊^ニ居^ル云^フ、
云^フ、彼^方乃^云と何^レ、以^上四^ツの譬^ハ、何^レも一^ツ
は^レ事^足、然^しも重^ね云^フ、詞^の文^{ナリ}、又^其
こ^の思^ハ、天^降し依^シ、如^ク依^シ奉^ル、國^中登^ル、
大^倭日^高見^乃國^乎云^フ、中^間乃^ハ瓊^々杵^尊、
日向[、]國^高千^穂、天^降坐^テ、彼^國、三^御代^大座^ニ

々^ニ、神^倭磐^余彦[、]天^皇、四^十五^年訖^の事^とを省^ス、故^ル、
文^表ふつきて直^ニ、神^武天^皇の倭^國へ天^降、
如^ク、後^世乃^ハ、事^の趣^意違^ハ、
ひて、通^ぬ文^也、然^れも天^降ハ、瓊^々杵^尊、倭^へ遷^幸ハ、
神^武天^皇坐^ス、勿^論の^事、敢^テ然^ラ畧^ス云^フ、
上^件、紀[、]文[、]省^文と^もの多^ク、是^ニ准^ヘて悟^ス、
神^祕第^五條、天^黄泉^幽現^顯露^大意[、]
此[、]五^箇乃^ハ大^事、中^に天^黄泉^幽乃^ハ三^ツ、特^ニ重^ク、貴^キ、
最^モ難^キ、限^リな^リ、此[、]三^箇の解^ケ、

加なりハ、神典の義理も共ふ解に惑ふも、此三ッにあり。悟るも、此三ッにあり。故昔より、此三ッと、神典三箇乃、祕事とぞ申傳へにきく。然るも、此祕事得たる人ハ、神祕とて人ふかゝらば、語る人其の學問を恃て、神祕あるをを、固^{モトヨ}他國^トあけ、絶て窺ひをさる事とし、あつたれば、世々の博士も、唯彼土の言らるるに、思ひよそんて、あつたれば、朝廷あつたや、より絶ふ、其かゝる私記等、あつた。故、慎ましくも、恐くも、あれと、為^ス便なく、此、神祕とあう、戴き、貴み、信を、信し。

漢國ハ、天と云る物一なり、中庸ハ、今夫天、斯昭々之多、及其無窮也、日月星辰繫焉、萬物覆焉、易乾九五、交、辭ハ、飛龍在天、上、泰傳、時乘六龍、以御天、繫辭上傳、ハ、天尊地卑、乾坤定矣、詩大雅、旱麓篇、鸞飛戾天、抱朴子、俗對三、彭祖言、天上多尊官大神、唐、韓愈、原人、ハ、形於上者、謂之天、此方、俗間ハ、云、思、所、と、同、く、只、蒼、と、名、ゆる、虚空を云る也、又、尚書、皋陶、謨、ハ、天、叙、有、典、天、秩、有、禮、天、命、有、德、天、討、有、罪、天、聰、明、自、我、民、聰、明、益、稷、ハ、天、其、申、命、用、休、勅、天、之、命、甘、誓、ハ、天、用、勅、絶、其、命、今、予、惟、恭、行、天、出、罰、胤、征、ハ、先、王、克、謹、天、戒、湯、誓、ハ、有、夏、多、罪、天、命、殛、之、爾、尚、輔、予、一、人、致、天、之、罰、仲、虺、之、誥、ハ、天、乃、錫、王、勇、智、永、保、天、命、之、類、ハ、也、彼、土、も、疑、ハ、人、有、つ、ら、ん、孟子、萬、章、上、篇、問、曰、天、與、之、者、諄、々、然、命、之、乎、と、云、問、あり、論、語

八佾獲罪於天無所禱也。天將以夫子為木鐸，雍也。天厭之，天厭之。述而。子曰：天生德於予，子罕有之。天之將喪斯文也，云云。天之未喪斯文也，子貢曰：固天縱之聖，吾誰欺，欺天乎？云云。天とのみ云て上帝の意なり。上帝のるハ次々出ま。列子天瑞第一云。夫天地空中之一細物。湯問第五云。含天地故無極。管子宇合第十一云。天地萬物之橐，宇合有橐天地。かくて天地の外に復空の有。如くは所謂高妙精微の理と云と云。何と云に。奇説也。宋張載西銘云。乾稱父，坤稱母。予茲藐焉，乃混然中處。故天地之塞，吾其體。天地之帥，吾其性。民吾同胞，物吾與也。大君者，父母，宗子，其大臣，宗子之家相也。云云。藤樹文集に舟にたるか如し。舜典云。肆類于上帝。毛詩湯之什云。蕩々上帝，下民之辟。抑章云。肆皇天弗

尚。小雅。小明。章云。明明上天，照臨下土。大雅。文王。章云。上天之載，無聲無臭。成公十三年傳云。昭告旻天上帝。禮記禮運云。以降上神與先祖。國語周語上云。崇立上帝，明神而敬事之。大戴禮用兵七十五云。升聞皇天上帝，歆焉。荀子正論篇第十八云。動如天帝。云云。星と指すと名を。後漢書。武帝本紀云。亳人薄誘，忌泰祠泰一方。曰。天神貴者，泰一。泰一佐曰。五帝。云云。天子三年一用太牢。具祀神三。一天一地。一泰一。云云。又曰。置壽宮神君，神君最貴者，太一。其佐曰。大禁，司命之屬，皆從之。史記。七。天官書云。中宮，天極星，其一明者，太一，常居也。旁三星，三公，索隱曰。按春秋合成圖云。然微大帝室，太一之精也。正義曰。泰一，天帝之別名也。劉白莊云。泰一，天神之最貴者也。禪書注封と云。如。天地萬物，太祖造化，本主と坐。天御中主神。

高皇産靈神、神皇産靈神等々。天神最尊神なるも、其とも知らば、日神、月神とも、閻奉て北極星と然も云る。可ツカ笑カシ々れ。吾神典ふは、星ハ甚く卑て、天有惡神名曰ツカ香カ背セ男ヲトとあるも、つりの物なるもや。又宋儒ふ至て、天、理也、氣也。まゝ、天、惟伸氣也。まゝ、伸氣謂之天。五雜俎云、天氣也。天有氣也。猶人、衛氣、魚、游水中、不見水、人在氣中、不見氣、まゝと云るも、右の如く、天と逃途ニゲミチに託ツカけにも用ツカひなうせむ。故、空理と設ツカくをり。又明、萬曆年中、西洋人、考出たる、天球地球圖と云物あり。其圖説云、凡天地、状如雞卵、天、包地、外地、居天中、猶曠也。天體如碧瑠璃、透映而七曜列宿層々、運旋不休。天動地、靜也。半覆地、上半繞地、外故二十八宿、亦半見半隱。天、轉如車轂、渾圓云云。此を多し、遠眼鑑以て望み、るふ。玉の空氣に映して、然う見えしに、こゝろあり。

め、えりて、知る、そのと思はる。西戎の愚らなも也。又佛説の三十三天と云も、所謂欲界、天、色界、天、十八無色界、天、ふ、配當たる、寓言として、固モトヨく學者の取ツカらざる所なり。これ、此論までもあり。凡、他の國みして、物の理をよく究むといひ、又物を穿て、たとへば、數々、空、星、海底のありゆる、魚、貝、小虫、に、こゝろ、こゝろ、しく、名を、は、く、く、國人も、古より傳へ、る、ぬ。天、黄泉、黄泉、字ハ、漢土、ふも、あれど、彼、の、す、け、獨、吾、神、典、ふ、の、み、つ、を、定、う、み、傳、へ、來、に、く、る、こ、は、貴、と、け、と、是、即、其、初、より、天、神、地、祇、の、鎮、ら、ぬ、靈、區、ふ、して、け、ん、ふ、皇、孫、尊、に、御、食、國、と、定、ま、り、け、る、國、の、尊、と、さ、に、依、て、な、

了けり。然ハあれど奇ク微妙アリテ思慮も至らば言
も及ばず。筆にも盡しつゝし。故此も多むのさう可
其大概を擧て其餘をそ。本文の其處にいく度もこ
とわらんし。彼異國の人々云る言ども多。多む空氣の
はろそあれ。天ハ現世の人々目ふえぬ隈と云て。黄
泉と界ちり。されハ約るに。天も黄泉も幽冥の中は。一
げの名よして。此世間外ふを出だ。近くいも。上
下左右身體を包て。只手に障らぬのみなり。遠くいと
ば。所謂六合の間。充満て。多む眼ふらぬむうり也。
然う目の及つぬ間。天。黄泉。幽の三界あるも。皆本文

に出。定うなり。其差別ハ。神ハ就て。天と稱へ。鬼ハ
就てハ黄泉と云。此二つを相撮て。幽とをい。その
伊弉冉尊。素戔嗚尊。大己貴命。事代主命等ハ。黄
泉と所知る大神也。自餘神ハ。其例ふらば。
天ハ。黄泉と援け。黄泉ハ。又天と扶くるも。人なれば。夫
婦の如く。一日中あらば。晝夜の如く。國王なれば。海陸
の如く。常に相助け交して。此現世を保有れば。世中ハ
所有るハ。咸幽冥神。御量みして。目ふえぬ幽より。興
されも。癡られも。幸へられも。禍なわれも。助けられも。
罰も。それとも。なれば。尊むべき限を以て。又畏るべ
き極みなり。先づ一わたり。此意を得て。本文どもに引

合せもてゆらば終ふけいさむそべきむそへしらに
大く廣く奇靈微妙なる状を其人ほとほと悟るゆき
つ修しかくて此天を恒ふ空の方につけて云なうへ
るを敬ひ貴みてなり又夜見と云ふ黄泉字を用ひ或
ハ根國底國など云ハ人の屍を地下に埋るより云削
て其一名を下津國下邊と云そめたるあり余も
始ハ黄泉を下邊と云に對て阿米といふも上邊の約
またるふやと思ひしうやあまの本文に合せては
らく考へわするに然るはけりざりき天も黄泉も目
に名えぬ界なるより云て阿米ハ空眼の中畧夜見

を闇の通音なり空目とて虚空を蒼々とも見ゆれや
も天の界此視とも不見を云も景行紀ふ倏亡と訓
たり阿加良目閉とて開とて眼の瞼を閉ふて目
きする間と云意以て倏亡字を訓しなり攝津國風
土記ふ都能久迹乃那迹波良利良能悲等都婆之伎美
和多良散婆阿加羅米那世所袋冊子に引る古歌ふ大
井川岩浪高し筏士よ岸のそみちにあうらゆぬせは
此等のあうらゆハ上の連きに牽れて脇見為勿と云や
うにすゆれれど是も本ハ空目の方より出るなり
まゝ神武紀ふ倏忽之間皇極紀ふ急なとあるも彼目

多し。く間の意なる故也。倏忽急等字を然ら訓する也。
即あううさふハ開眼閉間の中畧なるべし。白氏文集に
白地アカラサとあるも。文字ハ空眼方。訓ハ倏亡の意也。雄畧
紀ふ取急アカラサ取假アカラサなく訓する書言故事ふ急請假取急
と云里假ハ暇と通ず。左傳ふ咋を訓。注ふ暫也と有。
神代紀ふ短折を訓するも命間の暫なる意を以てよ
みするにこそ。後拾遺集の端書にあううさふ田舎
へ下る人ふと云るも假するにの意なり。此等合せて
言の本末をわいふむし。如此て天も黄泉も此現世
よと云と記を共に幽冥にて目ふえらぬ界なるふ。

天と空目アカラメと名け黄泉と暗ふウラキを夜見ヨミとも名け
ちと名れ。天をそ日ヒの旋マヒる間の幽冥をいひ豫
美を日光光明の至ラぬ間の幽冥をいひやあま
まにちうしるさせるやうにもあれど神も天といひ
鬼も黄泉と云るようして條々毎に然ら相違ひき
る多うれハなり。猶此等のうともハ次々いふとも
云をよくあうを考へてよ。
又此阿米アミと恒ふ天アメとも高天原タカノハラとも云ハ空ソラと高タカ高タカ行ヤク
やとも天アメと天原アメノハラとも云と重ねて云る詞なり。其を
海ウミと和多ワタとも宇美ウミとも海原ウミノハラとも云と又重ねて和多ワタ

津海とも云る類の云々なり。然るも高天原と云う
るに必しも蒼空の上なり。高き處と思ふを
拘泥するものなり。紀一書に伊弉諾伊弉冉二神坐于高
天原。曰當有國耶。乃以天瓊矛畫成礮馭盧嶋とあり。若
蒼天の上なり。いづれ直ふ海原と推探す。然
るもあつた。一書に伊弉諾尊與伊弉冉尊共生
大八洲國云云。至於火神軻遇突智之生其母伊弉冉尊
見焦而化去于時伊弉諾尊恨之斬軻遇突智為三段魚
又無血是為天安河邊所在五百箇磐石とあり。是も此
國ありて産み出て何れも皆此國ありてなり。

と天安河邊と云。又其血も因而生坐し神と云。天神
として武甕槌命經津主命等に就ても天降孫と云
る。次々の一書何れも此等を以て天と云。高天原と云
るも此國の外なりぬるを知へし。猶此外も神と就て
は此國の祠れり社と云。天日隅宮を申し又社屋上
に揚る千木とも高天原千木高知而と云。是神ハ幽
冥に坐して恒あま人の眼にあらざるを故なり。其坐處を
高天原と云。又古事記序に二靈伊邪那岐伊邪那美二神
と指為群品之祖。所以出入幽顯とあり。此幽を天と指
顯ハ此國を指せり。さて出入とは本文ハ天神諸命以

云云。於其嶋天降坐。猶宜白天神御所。即共參上云。
云。故爾反降云云。とありて。天より國へ。國より。天へ。一
樂度も昇降し。終つると云あり。又卷首に。天御中主
神云云。此二柱神者。並獨神成而。隱身也。宇麻志阿
斯訶備比古遲神云云。此二柱神亦獨神成坐而隱身也。
了た國之常立神云云。此二柱神亦獨神成坐而隱身也。
とある。此を此神とす。初天より。此現國へ顯出坐て
年来神量らせ終つるが。其神功既竟坐て。本つ天ふ。婦
入らせ終つると。如此ハ申せるなり。然れば隱身と付
天ふ入て。眼ふ名えに成終つると云あり。とて然

の眼ふ見えに成終つる。即其天上の幽冥なる故ふ
とある。猶此例ハ。紀ふ。是後伊弉諾尊神功既畢。靈運當
遷是以構幽宮於淡路之洲とある。是則國修理功畢坐
て後。天ふ入んと思行て。淡路ふ宮造らせ終つる。其宮
と幽宮と稱はと也。幽宮ハ。即幽冥宮にて。其宮ふ隱身
而。眼ふ名えに成終つると云。神名帳ふ。淡路國津名郡
淡路伊弉奈岐神社。名神や見えと。是也。

此條の細書ふ。登天とある。御身と。御靈と
を分て。左右云われど。説と設る人ハ。上件隱身
終つし神とす。例とも思ひ。又靈運當遷とある。
字どとの意と。よく思はる。よろれひ。也。されハ

其下ふ。日之少宮とあるも。天日の意も付あはれ。天日隅宮なりと云ふ。日と同じく。かの幽冥久潜不分宮と云ふ。即寂然長隱者矣と書る字どもも。想ふべし。倭姫世記なる。日之少宮ハ。天照大御神も係れ。天津日の乎と。思ふやうなれど。それども。幽冥宮と云ふ。即其處ハ。幽契とある。み合せて知べし。かくて次ハ。黄泉と合せて。猶も云ふや。あはれと。天の乎ハ。姑く本文の釋にゆつりて止ぬ。

黄泉と云ふ。幽冥の中ハ一ツにて。目にええぬ界をれ。名義ハ夜邊にて。闇と音かよ。されば萬葉三ふ。悲嘆尼理願死去歌曰。足氷木乃山邊乎指而晚闇跡隱

益去禮云云。九ふ。哀弟死去作歌。天雲乃別石往者。闇夜成思迷。匍匐云云。たゞゆめ。是其魂の行方の眼ふ。ええぬやうゆくハ。闇ハ。如くなれば也。後世の歌みし。闇路より闇路よかよふ。あともよみ今の俚語も。亡命して行方不知なり。跡を闇にちと云も。皆同じ心ななり。但黄泉界が闇き処と云ふはあはれ。比して云なり。ハ。此界も。なるは此世中の内ふ。天の界と全相似。舊説どしの如く。此世界の外ふ。別に然云域の。一處は。あはれ。あはれ。只目ふえゆると。目紀。黄泉段。一書曰。伊奘諾尊欲見其妹。乃到殞斂之處。是時伊奘冉尊猶如生

乎^{ネノ}出^テ迎^ニ共^ニ語^{ハテ}已^ニ而^ニ謂^ニ伊^ハ契^ニ諾^ニ尊^ニ曰^ク吾^ハ夫^ノ君^ヲ尊^ニ請^フ勿^ク視^ム吾^ノ矣^ト
言^ハ訖^テ忽^タ然^ニ不^レ見^ル于^ニ時^ニ闇^ニ也^ト是^レ則^チ女^ノ神^ヲと奉^ル斂^ル殯^ル宮^ニ
地^ヲと指^シて黄^ノ泉^ノとを申^セるは猶^ト如^ク生^ル乎^ニ出^テ迎^テ云^ク
ハ現^レき御^ノ形^ヲふらりて顯^ハれ坐^シて物^ヲせよ勢^ヲ終^ハひしと云^フ
る文^ヲぢり

但^シ如此^カ天神^ノの御^ノ上^ニに未^ダ崩^ラ坐^スる有^ルべきや
然^レバ此^レを實^ニふは彼^ノ伊^ハ契^ニ諾^ニ尊^ニの幽^カ宮^ニに隱^レれしを
ひしやうに此^レ女^ノ神^ノも黄^ノ泉^ノ界^ニに隱^レ身^シ終^ハひつ
と黄^ノ泉^ノと云^フうに崩^レ比^レにこれの例^ヲを兄^ノ
めてゆくに胎^ノより産^レれ終^ハし神^ノを死^スりて出^現
の神^ノを死^スるも幽^ノ冥^ノに隱^レ身^シ終^ハひのみぢりハ
ぢり其^レよりハ本文^ノの釈^ヲかきと云^フと兄^ノ知^ル

し然^レハあれと此^レは黄^ノ泉^ノと此^レ世^ノ中^ノの例^ヲ取^ル方^ノ
も妨^ガけなく何^レもに同じしを次に引^ク文^ヲ
もその心^ヲしてすし出^テ雲^ノ國^ニに御^ノ身^ヲと隱^シ
終^ハひしと兄^ノハ心得^テ安^クうりなく

又^タ忽^タ然^ニ不^レ見^ル成^シ坐^スたるも目^ヲ觸^ルるに界^ヲわらう故^也
まゝ于^ニ時^ニ闇^ニ也^トを神^ノと申^セるも幽^ノ顯^ノの界^ニあるより
ぢりたれば隱^レれ終^ハし御^ノ魂^ヲみけ堪^テ坐^スりしあり皆^ニ是^レ
殯^ニ斂^ル之^ノ處^ニありけりなりと云^フるは又^タ一^ノ書^ニ曰^ク伊^ハ契^ニ
諾^ニ尊^ニ追^テ至^リ伊^ハ契^ニ再^ニ尊^ニ所在^ノ處^ニ便^ニ語^ス之^トし云^ク此^レを御^ノ魂^ヲ
ふまれ現^レ御^ノ身^ヲにまれ其^レ處^ニハ此^レ國^ノ土^ニありけりなり是^レ
をも猶^ト黄^ノ泉^ノと云^フるは又^タ素^ノ戔^ノ鳴^ノ尊^ノ段^ノを遂^ニ到^リ出^テ雲^ノ

之清地焉云云。於彼處建宮云云。已而素戔鳴尊遂就於
根國矣。一書曰。素戔鳴尊云云。居熊成峯而遂入於根國
者矣。とある。是又出雲にまれ。紀伊國ふまれ。直ふ其處
ふして。幽冥に隠れ坐つと云なり。其地より出立して
遙けき黄泉國へ適
坐ると云。されば出雲ふてハ。其處を熊野といひ。紀伊
國ふてを熊成と云。共に隈成て。隱る御座よしの名
也。故記ふを其地作宮坐と云。他へ行つてなれば坐
やけ云べうらす。又次ふ。大國主神の可參向須佐男命
所坐之根堅洲國とて。適坐まじ地も。出雲又還坐し地
も。同じく出雲地なるなり。本文ふて明々し。地底より出雲
ハ此を其黄泉と指せり。此等皆相合せ。黄泉
同じ出雲國の内よりなり。此等皆相合せ。黄泉
國或ハ根國なり。云々。別はさる境域のありにあり。は
るすを思ひ定む。國とを。此國ふ比て。語る詞
み。夜食國の類ひなり。又此紀ふ。大己貴神の避國終
に黄泉ふ入坐る條云。今我當於百不足八十隈隱去矣。
言訖。遂隱隈。此云。矩磨塗。記ふ葦原中。國者。隨命。既
獻也。唯僕住所者。云云。治賜者。僕者於百不足八十垺手
隱而侍とありて。其上を黄泉といひ。根堅洲國と云。
其。同界をけ。此も。隈と云。此三つと相合せて。黄泉
と云。根堅洲國と云。共ふ幽冥の隈なり。と云。

稜威道別
二之卅七

せし文なり。八十と云る意ハ。次侍と付。幽冥の隈ハ
隠て人々を名もねど。其宮ハ侍坐して。玉體と守護奉
仕と。白るなり。是又遠き國とて。其協ひつゝに語
も也。又萬葉三ノ田口。廣麻呂死之時。刑部垂麻呂作歌
ハ。百不足八十隈路ハ。手向為者。過去人余。蓋相半鴨。此
歌の意々。其人を惜めとも。今ハかひあし。若其死て往
黄泉路隈ハ。手向のせらふ。物なりハ。蓋も又逢る
る。ちりれん。うと。歎きなり。あまうに云なり。是ハ死
人の魂の行方に就て作らるハ。隈路ハ。同く黄泉の
幽隈と指る。ういよく。著明し。かくて上の大己貴神段

ハ。八十隈とて。も云る意ハ。彼御國讓。御契約の如く。此
現國ハ。少も心残り。今日より。心清く。幽冥も。八十と
云深き隈ハ。隠んと云。勵み詞也。萬葉に。深霧と。五百霧
と。よみ。深き隈と。百隈とも。八十隈とも云るに。同じ心を
うらり。又垂麻呂歌の。八十も。右の八十隈と。同じ九。幽
冥の隈深きと。はよく云んと。その詞也。然るも。此等ハ
八十と。歴行途の隈ハ。八十と。送る。ゆる意と。心得る
ハ。彼地底の根。國と思はる。うらりの惑ひ也。此ハ人
ありて。然らば。紀一書ハ。極遠之根。國と書。萬葉九ノ遠
津國。黄泉乃界丹。なると。何と。いふ。其ハ生。死

の隔マの遙カふ遠キきうの詞也。遠シとば人死トを再ヒ
會カく音信コふもかれりねは是レほど隔マの遠キも
乃ハあハこれハなり。佛書にイちノ十ノ萬ノ億ノ土ノとハいハ
今ノ俗ノ文ノ御ノ遠ノ行ノとハかクなリとモ
同シ心ハけハなり。又歌に雲ノがクれトよクなりシ来シ
々ノ隈ノがクれノ義ハふテ幽ノ冥ノの隈ハ隠レて目ハ又ハえハ
々ノをハえハれハ是ハかレば此ハ黄ノ泉ノの異ノ名ノ等ハ拘レ泥ハ
右ノ古ノ語ハ同意ナり。かレば此ハ黄ノ泉ノの異ノ名ノ等ハ拘レ泥ハ
べきにハあハず始メ屍ハふテ下ニ卧トと云フ。根ノ國ノとハいハ
根ノ國ノと云フ。底ノ國ノとハいハ。底ノ國ノと云フ。遂ニ堅ニ洲ニ國ノ
とハ説クに云フ。轉シ来シあり堅ニ洲ニハ片ノ隅ノの略キ也。其ハ同シ
じ此ハ世ノ間ノ在リなリ。目ハ觸レぬ界ハとハ以テ比シゆル
也。即吉野山ノの深キ奥ハ隠レて世ノ人ハ住スとハいハちス

ぬ一郷と國ノ巢トと云フ。是ハ國ノ隅ノのハ義ハなりとハ
合セてハし。故ニ此ハ黄ノ泉ノ界ハとハいハ。諸ノ禍ノ凶ノ等ハの溢リ来テ
殃ニ災ニとハいハ。御門祭ノ祝詞ハ。榑ノ磐ノ牖ノ豊ノ磐ノ牖ノ命ノ登ト
御名乎申事波。四方内外御門尔。如湯津磐村久塞坐氏
四方四角与利。疎備荒備来武。天能麻我都比登云神乃
言武悪事尔相麻自許利相口會賜事無久自上往波上
乎護利自下往波下乎護利待防掃却言排坐氏中畧平
氣久安久云。道饗祭詞尔根國底國与利。鹿備疎
備来物尔相率相口會事無氏下行者下乎守理上往者
上乎守理夜之守日之守尔守奉齋奉礼止云。ちハちハあハあハ

是其、障礙と懼れしを移してなり。此ハ悪神の祟りの
みろそあゝゝ。つゝゆる怨靈鬼物妖物に属も。皆此界
ハ潜隠れて人あれど障礙をなれり有る故也。さら
ハ黄泉ハ然る凶悪ら々物の聚栖界りと云、に然らば
みろハあゝゝ。尊き神等の坐する所。既ふ云が如くふ
て。又加の怨靈魔物等ハ隠れ居る。隈くまてとてをて
云なるを。其界のまゝれて廣き故ありある。まゝるふ
近世の古學者等の黄泉といへば。つゝいゝつゝ。汚
穢く凶醜き國との心得しるを。右の祝詞、文と記ふ
宇士多加禮斗呂々岐互たある類に。談辭ふなるが

るに。つゝいゝ。黄泉界の貴きる。紀、一書に。是時
頃之首渠者大物主神及事代主神乃合八十萬神於天
高市帥以昇天陳其誠款之至。時高皇產靈尊勅大物主
神。汝若以國神女為妻。吾猶謂汝有疏心。故今以吾女三
穗津姫配汝為妻。云とある。是皆黄泉神等なるに。天
み率ゆ移して。天神達のをば。うりにも。賞愛み移して。
其上に高皇產靈尊御女を以ん。賜し。るをば。いゝ
に心得し。るふ。うり。殊ふ大己貴神の天日隅宮造
の條下云。其造之制者柱則高太云云。又於天安河亦造
打橋とあり。打橋を。移橋ふて。天と。黄泉と。互に往反て

睦^{ムツ}び^ビ孫^{ムコ}ハ^ハん^ン為^ニの^ノ橋^{ハシ}なる^ルぞ^ヤ。か^カれ^レバ^バ彼^カ凶^ケ惡^ガ事^{コト}のみ
あ^アら^ラあ^アら^ラび^ビ世^セの^ノ幸^{サキ}福^{ハヒ}も^モ吉^{ヨク}事^{コト}も^モ猶^{ナホ}此^{コノ}黄^{ワウ}泉^{セン}界^{カイ}より^{ヨリ}こ^コそ^ソ
向^{ムカ}ひ^ヒ来^キる^ルぞ^レ。其^シと^ト今^{イマ}神^{カミ}典^{テン}の^ノ上^{ウヘ}ふ^フて^テ一^{イチ}二^ニ申^{マウ}さ^サば^バ伊^イ奘^サ
諾^{ダク}尊^{ソノ}神^{カミ}功^{コト}ハ^ハ黄^{ワウ}泉^{セン}より^{ヨリ}伊^イ奘^サ冉^ニ尊^{ソノ}相^{サマ}助^{タシ}坐^{マシ}て^テ天^{アメ}上^ノ黄^{ワウ}泉^{セン}書^{ヨル}
夜^{ヒル}の^ノ大^{オホ}君^{キミ} 天照大御神と素戔 定^サ坐^{マシ}天^{アメ}照^ノ大^{オホ}御^ミ神^{カミ}御^ミ時^{トキ}ふ
は^ハ黄^{ワウ}泉^{セン}神^{カミ}素^ス戔^タ鳴^ネ尊^{ソノ}相^{サマ}助^{タシ}坐^{マシ}て^テ國^{クニ}大^{オホ}君^{キミ} 天忍穗 定^サ坐^{マシ}し^シ皇^{スメ}
御^ミ孫^{ムコ}尊^{ソノ}御^ミ時^{トキ}ふ^フ黄^{ワウ}泉^{セン}神^{カミ}大^{オホ}己^ニ貴^キ命^{ノミコト}國^{クニ}修^シ理^リ獻^{ケン}て^テ御^ミ食^シ國^{クニ}
定^サて^テほ^ホろ^ロお^オも^モひ^ヒの^ノ如^ニし^シ猶^{ナホ}此^{コノ}外^{ソノ}ふ^フも^モ少^{オホ}彦^{ヒコ}名^ナ神^{カミ}段^{タナ}ふ^フ嘗^{カシ}
大^{オホ}己^ニ貴^キ命^{ノミコト}謂^{イハ}ふ^フ少^{オホ}彦^{ヒコ}名^ナ命^{ノミコト}曰^{イハ}く^ク吾^ワ等^{ラガ}所^{ツク}造^ル之^ニ國^{クニ}豈^ア謂^{イハ}善^{ナリ}成^リ之^ニ乎^ヤ
少^{オホ}彦^{ヒコ}名^ナ命^{ノミコト}對^{カウ}曰^{イハ}く^ク或^シ有^ル所^{ツク}成^ル有^レ不^レ成^ル是^{コノ}談^{ガタリ}也^ヤ盖^シ有^ル幽^{カミ}深^{コト}之^ニ致^ス

焉^ニ其^シ後^{ノチ}少^{オホ}彦^{ヒコ}名^ナ命^{ノミコト}行^イ至^ス熊^{クマ}野^ノ之^ノ御^ミ崎^{サキ}遂^ニ適^ス於^ニ常^{トコ}世^{ヨリ}鄉^{サト}矣^ニ是^ニ
其^シ不^レ成^ル處^{トコロ}と^トげ^テ幽^{カミ}冥^{コト}より^{ヨリ}助^{タシ}け^テ孫^{ムコ}ひ^ヒし^シち^チり^リ又^{マタ}記^シふ^フ須^ス勢^セ理^リ毘^ヒ
之^ノ男^ヲ命^{ノミコト}ハ^ハ大^{オホ}國^{クニ}主^{ノミコト}神^{カミ}と^ト黄^{ワウ}泉^{セン}より^{ヨリ}助^{タシ}坐^{マシ}て^テ其^シ上^ノに^ニ須^ス勢^セ理^リ毘^ヒ
賣^ウ命^{ノミコト}と^ト副^{ソボ}と^トせ^セ孫^{ムコ}ひ^ヒし^シも^モ猶^{ナホ}上^ノの^ノ例^{レイ}ハ^ハ如^シし^シ此^{コノ}等^トも^モ相^{サマ}
合^アせ^セて^テ天^ツ神^{カミ}と^ト申^{マウ}せ^セども^モ現^イ國^{クニ}み^ミし^シて^テ黄^{ワウ}泉^{セン}の^ノ助^{タシ}け^テな
く^クとも^モ神^{カミ}功^{コト}の^ノ不^レ成^ルほ^ホろ^ロと^ト思^ヒ明^アむ^ムべ^ベし^シか^カれ^レバ^バ此^{コノ}天^ツ
黄^{ワウ}泉^{セン}の^ノ界^{カイ}ハ^ハ貴^キむ^ムべき^キ限^リを^ヲこ^コして^テ又^{マタ}恐^{オソ}る^ルべき^キ極^キみ^ミな
ま^マな^ナれ^レと^ト此^{コノ}現^イ世^セに^ニあ^アる^ル人^{ヒト}の^ノ目^メに^ニ觸^サる^ルこ^コろ^ロ誰^{タレ}も^モ遠^{トホ}
き^キ界^{カイ}と^ト心^{ココロ}得^エて^テま^マし^シも^モ思^ヒひ^ヒて^テあ^アり^リふ^フる^ルこ^コろ^ロ愚^{オロ}う^ウな^ナれ^レ
此^{コノ}方^{カタ}より^{ヨリ}ハ^ハ然^シら^ラぬ^ヌと^トれ^レと^ト彼^{カノ}方^{カタ}より^{ヨリ}は^ハほ^ホろ^ロぬ^ヌ神^{カミ}の^ノ

照覽まゝにゆゑる。譬へば、只一重なる玉簾も、外より
其の内に見えざれば、内よりハ、外のよゝく見え透く如く
あり。ある慎まざるんや。恐れざるんや。此他を、次々
云。現明、顯露を對へて心得ざるんとして、省きつ。

顯露と云。此紀大己貴神段、一書曰、高皇產靈尊乃還遣
二神、勅大己貴神曰、云云。夫汝所治顯露之事、宜是吾孫
治之。汝則可以治神事。神字ハ、幽の借字、古書云云。於是

大己貴神報曰、天神勅教慇懃如此、敢不從命乎。吾所治
顯露事者、皇孫當治。吾將退治幽事。云云。顯露此云、阿羅
幡貳。此下に、幽此云、阿羅。まゝ出雲國造神賀詞曰、國

作之大神乎。毛媚鎮天。大八嶋現事顯事。令事避支。云云。
なをある。此を彼時、皇御孫尊ハ、幽より顯る出現。此
大己貴神ハ、顯より幽る隱れ。此よりつきて、御互ハ、幽
顯と取替せ給ふるを云ふ也。故、此時より皇御孫尊
ハ、全此現世の事を所治看て、幽事ハ、知るべきなり。大
己貴神ハ、幽冥のみを知りて、此現世界のみを御形體とす
る顯ハ、成給ひき。
但、幽事と云。何れの神ふても、此世中の事を、幽冥よ
る量、此の御所為と、廣く云て、此一柱ハ、局るに、あ
らね。と云。此名目の、あ、始て出づる也。此時迄
大己貴命、此國を領りて、顯事以て治り給ひしを、皇

御孫、尊ホ奉レ讓テ。國と避サリ。今イマも幽冥ウツミより守護モリ奉レ。
んと申シ。孫ムコに就ツて。事の改カる処トコロなる故ユ。出デ。也。
近世の釋シヤクふ。此、幽事と專セン。大己貴、神の知チ。孫ムコの事コトの如ニ。
くみ。云イハ。なせるもひヒ。又マタ。此コノふ不圖フツ。出デ。れ。バ。ワ。て。
假カなるも。わワ。まマ。に見過ミ。せ。る。な。も。皆幽顯の重オモシ。
々ツツ。ら。り。を。も。得悟トクゴ。さ。る。ふ。の。ひヒ。が。う。さ。う。し。

是レ天地の初ハジメ發ハツ。天神達アメノカミノタチに定サり。孫ムコへ。隔ヘ。なり。れ。バ。天アメ。
神の御子ミコと稱ナ。せ。も。天アメ神等カミノタチの御守護ミモリハ。御守護ミモリと。し。
ひヒ。な。此、現ア。世ヨ。出デ。せ。孫ムコ。ひヒ。て。後ノチハ。幽冥ウツミより来キ。らん。幽
災ウツミを。一ヒト。ふ。は。避サケ。と。せ。孫ムコ。ふフ。能アタ。つ。未前ミサキと。知チ。は。る。も。
あア。つ。ら。御壽ミコトノスと。御心ミココロに。まマ。つ。せ。孫ムコ。ふフ。も。あア。つ。ら。凡ソレ。

る。御上ミカミも。幽カミ。不勝フタ。孫ムコ。ひヒ。大座オホイシを。名ナ。て。疑ウタガ。
ふ人多オホクニヒト。れ。ど。其ソノハ。此、幽顯の阻界ヘタテと。志シ。ら。ぬ。心ココロなり。
疑ウタガ。ふ人多オホクニヒト。し。と。世ヨ。に。天皇の御難ミガタふ。あア。せ。孫ムコ。を。
見聞奉ミキコト。て。る。と。天神の御皇統ミスメノミマツなる。ば。さサ。や。う。の。難ガタ。
ハ。あア。る。よ。ど。き。を。と。下シ。に。お。も。ふ。な。を。ひヒ。と。云イハ。然サ。ら。ば。
其界ミカイに至イ。て。ハ。天皇も。世の凡人ヒトも。同ナ。じ。うウ。と。云イハ。に。
る。れ。異イ。なる。限カ。を。異イ。なり。異イ。あア。る。ぬ。限カ。ハ。異イ。なら。
に。此、差サ。ハ。此紀の事實コト。又マタ。己ミ。が。神異例カミイリを。引ヒ。く。天皇部カミノベ。
皇祖ミマツノ天皇部カミノベを。考合カウカフ。せて。知チ。べシ。本文の釋シヤク中ナカ。も。
少オホクニ。し。ハ。云イハ。る。や。あア。つ。べシ。

猶ナカ。此、幽顯の隔ヘ。ハ。嚴重オホクニ。なる。る。ハ。萬葉マンヤクも。傳ツ。へ。て。
よヨ。み。つ。り。二卷ニマキ。天智天皇崩ミタマシ。時トキ。皇后ミコトノ。御作歌ミコトノ。空蟬ウツセミ師シ。

カニニタヘネハハナレ井テアサナゲクキニサカリ井テアガコラキニタナラバテニマキ
神尔不勝者。誰居而朝。嘆君。放居而吾戀君。玉有者。手爾卷
持而衣有者。脱時毛無。吾戀君。曾伎賊。乃夜夢所見。鶴ま
た九卷。著向。弟乃命者。朝露乃銷。易杵壽神。之共荒競
不勝而云云。空蟬ハ借字ルテ。現身ノ義。神ハ二フ共ル
天武紀云。語ハ。畏ミノ義。幽顯トモ書ク。此等ヲ云レハ。加
微云。語ハ。海部ノ住人ト。阿麻ト云。杵ノ云。少ヨリ。此
初ノ歌。不勝ハ。既ル崩坐。幽入坐。御魂ル冬。假
令未。靈床を離れ。死に。現の世ル在身ハ。不勝し
て。言問奉。王。と。嘆。を。死。也。次。歌。荒競不勝。而
を。假。な。る。現。身。の。命。な。れ。ハ。幽。事。の。随。ル。得。辞。不。勝。て。死

失々々々。惜め。な。り。斯。て。此。現。の。意。を。博。く。の。こ。し。
人。を。聞。も。見。も。慮。も。為。も。纒。ふ。局。有。ル。もの。あ。ま。其。局。と
人。死。世。の。界。と。して。顯。も。明。も。云。又。其。と。現。在。な。る。
方。に。取。て。現。と。云。即。現。世。も。現。國。も。現。人。も。現。
身。も。云。類。是。也。此。等。何。是。も。人。乃。關。る。一。局。み。て。幽
冥。に。反。對。な。り。と。故。ふ。古。書。は。是。を。博。く。天。黃。泉。幽
カ。對。て。の。み。を。云。な。り。ひ。し。然。る。後。世。幽。顯。の。深。き
い。も。れ。あ。る。を。と。あ。ら。に。知。ら。あ。り。て。以。來。の。人。を。偶
々。詞。云。夢。現。と。よ。み。て。夢。對。し。現。と。右。の。幽。冥
カ。對。云。と。同。一。ノ。聞。混。て。其。意。を。謬。る。を。常。お。ぼ。う。と。

彼、夢の對へたるを、寐る間を、假ふ夜に見ふ此て云なれ
バ、其も一つは詞をあれど、實ハ夢も現も共ふ此世
の物なれハ、此幽頭を分つ方に、近世の學者等ハ、右の
至て其義理いふとたがへり。近世の學者等ハ、右の
語をもと、何れもゆるうせに見過し、思ひこして心得
うねるるを、皆右の意と知らぬ也。とて人間の預れる一
局と云ハ、つうさゆるうとつうさふ。先づ此廣き世、中
はして、あづうふ思慮のゆきとてく局也。一其力量の及
ばしし限也。二眼を見とらるる限也。三耳に聴とら
るる限也。四身に受納らるる限也。五此五つが、僅ふ人
乃許されしる限也。其及ばぬ數ふくくふれ
バ、唯千重の一重のみある。畢竟此世間を、咸悉神の所

領知靈區をうけるを、其中に人と栖せて、僅ふ許ゆる
る右の其、一界をけ人の心あるを、廣た世界と思ひて、あ
はちうりやうと。
狐狸やうどの人、目ふ觸ぬ、あどすも、あどすも、微
弱獸まうら、幽冥の方へも、少しハ入らう。幸の有て
やうべし。神の使ハ、うらみふらうのありて、若然らう。
又穴の内ふ、潜み馴て、自然ら然るふう。何れにも奇
きものやう。亦禽獸乃中に、夜も燈の光をを、情ハ、
して、眼の視る物多き、を野山に棲物ハ、然らう。い
ても、得堪べうらね、只其のみに、許されて、生得る
やうべし。もし人に、狐狸の術ありて、夜禽ハ、眼翅を
持し、うげ、如何ある事、為出んも、知べうらねと、神の
許し、うげ、うらねと、固く人の、彼ふ劣るふを、非を

童が狐と打殺れりあるを。彼が顯明に勝つる所
 あり。又大人の着るる物は人の幽冥に不勝る所
 あり。凡そ是を以て世中此異倫の物に互に己がさ
 けちある。皆神の御許に因てたつるを。曉るべし。其
 中の人ハ許されしるる最多人ハ生ある物に
 官と云へし。天地の靈と云へるるハ空中にお
 き。飛鳥及及び陸中におきてる。走獸及及び
 水中におきてる。魚鱉に及び。況や龍の猛勢及
 及及んや。晝ハ日神の御光を借れて。何事もあ
 り。夜ハ火の光を借れて。見るるも能はば
 此ハ目のえゆるがえゆるも立れ。思量あるがあ
 る。此の如く。次云へる。如きなり。

故常に日月を旋らし。風雨を降し。雷震と鳴動し。四時

を序て。草木と生枯させ。海水と満乾させる。類よし
 て。天地の間ふ。ありとあつるるも。一もつ究りらる
 ば。るやハある。是れ初り。高皇産靈。神皇産靈。大神等
 の産靈の御魂播坐ける。世に萬品生繼て。人も其
 中の一つなり。身始も志し。魂の来し方。行へ
 も志す。明日死るを。今日ふ志し。此世中に。第
 一用ある。未前明日よのうも。一寸も智サリに到らばる
 皆是幽冥に。借物なれば。あり。然らば借物なり。これ
 ハ誰も久しく存へ留るる能はば。其脆くも。能はる
 世に英雄剛者と呼ぶる人も。出る息を。一止れば。立

所ふ死ヌづり物ナリなるコトしレば萬葉ヲ鬱蟬ノ借ル
此世ヲ乎ヲ云フまツ打蟬ノ借有身ニ在者ハ云フ空蟬ノ借
借有命ニ云フまツ打昔見ル乃世ノ事ト在者ハ為シ便無登ト云
云フ此等ノ鬱蟬ヲ打蟬ト空蟬ト等ト何レ也ト借字ト以テ現身ノ義
是即幽冥ト借物トなりクレバ命ト何レ也ト心ト小ト任
語トふコト多クもシみコトもシ其間トまツを
世れ庸人トも此古トこトもシ忘れテけりシありシ他國
あはかシくシ貴ク神ノ御傳ヘけりシ無クなりシ故トハ云フ
なラらシ此幽顯ノ隔境トあるコトをシむけシ得ル志トにシ動スれ
人々天地ノ靈也ト狂ク漫ク又人ト和カふ如シたラんト思ヒ
驕ク現レ身ト及バれルぬル上ニも賢クてシけル空理ト

設けて凡て神の所行セる世間ト治亂興廢ノうヘを
も人の思量ニ及バる物ノ如ク又己ガ智計ヲ任セせ
る物ノ如クはシづクすル愚クさシもシ立所ふ
知ラれルゆクなん吾ガ先代ノ舊事ノ尊ニたラ據テなりケる
猶ハいハば云フ海トとシやシ九妙トなりシ遂ニ盡スる期あり
されバかクて止ムつ
故ニ粗クあらレど上ニ件ト神祕ト五箇條トなりシ神世ノ事
を終ル悟ルべき塩土ト老翁ノ導キにシて幽顯トをシりシ人
世トをシりシべき思兼ト神ノ御魂ヲりシれバいハいハ
るコトをシ尊信シて世れ俗意トをシりシて凡慮ヲりシれシ百度

遍^カくも千^カくび^カ鍊^カて本^カつ正^カ實^カふ復^カし其^カ正^カ實^カと廣^カく世^カ
ふ押^カ及^カほそん^カを思^カふべし。所^カ詮^カ此^カ古^カ傳^カの本^カ義^カの由^カ
に行^カ至^カる^カ限^カる^カハ本^カつ神^カ國^カふ^カ淨^カむ^カる^カあり^カり^カど
れ^カが^カぞ^カう^カし^カと^カぞ^カん^カ一^カく^カび^カ如^カ此^カ真^カれ^カ肯^カと悟^カる^カ出^カて
録^カけ^カけ^カる^カう^カハ^カ此^カ志^カと受^カ繼^カ人^カとす^カべ^カに^カ絶^カぞ^カと^カあ
らん^カ其^カ人^カち^カち^カお^カり^カふ^カ云^カん^カそ^カも^カく^カ吾^カ神^カ典^カの^カ學^カび^カハ
偏^カふ^カ忠^カ誠^カの^カ情^カより^カ出^カて^カ敬^カ神^カの^カ信^カの^カ致^カれ^カぬ^カと^カなり^カけ
り^カは^カ君^カを^カ想^カひ^カ神^カと^カ信^カじ^カる^カ心^カ薄^カく^カし^カハ^カ未^カ遂^カ果^カれ^カり
あり^カり^カど^カ故^カ向^カに^カ歷^カ朝^カ神^カ異^カ例^カと^カ云^カと^カ撰^カひ^カて^カ先^カづ^カ天
神^カ地^カ祇^カの^カ靈^カ異^カ皇^カ祖^カれ^カ尊^カ重^カく^カま^カり^カお^カす^カ徵^カと^カ舉^カげ^カお^カき^カつ

必^カれ^カ此^カ道^カ別^カと^カ相^カ合^カせ^カて^カ奉^カ君^カ敬^カ神^カの^カ信^カと^カ篤^カく^カら^カべ^カし
世^カふ^カ皇^カ神^カ道^カを^カ學^カび^カな^カが^カり^カ或^カハ^カあ^カり^カぬ^カ疑^カひ^カと^カ懷^カき^カ或
々^カ他^カ國^カれ^カ言^カ種^カふ^カ諂^カふ^カり^カる^カを^カ固^カく^カ神^カと^カ信^カじ^カ君^カと^カ尊^カみ
國^カを^カ思^カふ^カ情^カの^カ薄^カき^カ故^カり^カぞ^カあり^カそ^カも^カく^カ皇^カ祖^カの^カ久^カし^カき
恩^カ澤^カと^カお^カり^カけ^カい^カ今^カ上^カ皇^カ帝^カも^カ戴^カる^カべ^カく^カ皇^カ神^カの^カ尊^カく^カ坐^カ
る^カと^カち^カら^カバ^カ皇^カ統^カも^カ仰^カぎ^カれ^カぬ^カべ^カく^カ皇^カ統^カの^カ貴^カく^カ坐^カる^カを
ち^カら^カば^カ國^カ體^カの^カ重^カき^カる^カも^カ自^カ然^カと^カ思^カふ^カべ^カき^カその^カふ^カあ
ら^カり^カや^カ彼^カ君^カなく^カ主^カふ^カき^カ國^カと^カら^カり^カも^カ其^カあ^カら^カく^カに^カ國^カ體^カと
云^カもの^カあり^カ況^カや^カ吾^カ神^カ御^カ國^カにお^カよ^カり^カて^カそ^カや^カそれ^カハ^カ御^カ國
學^カひ^カそ^カら^カ革^カハ^カ云^カも^カそ^カら^カれ^カる^カ何^カ學^カび^カす^カら^カ徒^カも^カ御

國ア生れし人ハ限ハ先づ吾國體と云ふんを要
と云ふし此とよく云ふべし事とある時ふ臨て國
の害ともなりようきだハ君の御大事とも成へき程
乃そのふぎあるもれども此國體をよく知んこと
いへば易ういへ近昔に御國學びして先生大人な
が名のみをこぞしく呼ばし人もよく皇大御國の
國體を知れりし人ハ纔ふ一人二人のみなりきま
て今世ふして物學びする人を見るに歌ハ多し國體
を忘れし後のまづりをもてやし倍ふ言語の活用
を論ひ猶さうねも後世の物ふのみめげひて

あつら月日を送れるが多うはくそつとあぢたなく
くらき一はめとちれ或人の寶曆頃記きりし隨筆
ふいそく歌も日本紀古事記万葉集等に載たる王臣達
乃如くによく古を知史典ふ通じてさて感ざるもある
時ふよう出らんハ信はうたと云ふのなり後世何も知
ぬ者かうのみよむ狂哥俳諧と作りて無益に光陰
を送ると同じ事也武士なうハ武事に懈るべく農夫
たうハ農事を妨げし若暇あうハ古史典とよみて道
乃かうはしとぶふ心得歌ハ感發するに任はべし弄
ひふそまべううんちやく仁和寛平以来歌を弄ひ物

としたり。是朝廷は衰へ、^{キヤ}芽かり、就中堀河院の寛治の頃より、後鳥羽院の建久の頃ふ至る。政事を執へき人をも、歌を職業に如くせりしう。はひふ天下を失つり、歌ふ得失あり、感發する時あり、實に鬼神をも感ぜしむべし。弄ひふする時ハ、英氣を失ひ、弱ふ墮入て、吾國體を失ひなん。况や後の所謂近躰ふ至てとや。^{以上}と云ふ。今按ふ、歌も古の道ふ入立、一つれたげき、なごんべんれ、^ハそのみも云、かごうん、みやとも思へや。今ハ殊ふ、泰平の徳化ふあよると、名利を貪り、國體を忘れて、めくくくなれる人への警とハなりぬべし。此

皇國學ひする人にも限らば、漢學も徒の詩文を弄ひにそりるも、同じくや也。猶さらぬも、繞ふ字義訓詁、句法、章法など云々を、たけくしく唱へ、道ハ漢國の外あり、無きもの、^ゴ如心得て、吾國體を思ふ人、絶て思へば、是は思ひなり、由くべき、そのほをある。幼稚の時より、孝經、小學、四書、六經、十三經、廿一史、猶進みてハ、子集百家、此書と讀とよむ書編、皆漢人の作らぬあり、これハ身ハ大御國ふ生れし是ども、心をこや、漢國ふ移はけて、はく、さんがに時ハ顧て、我皇國ハ事も知られてハとて、なごく日本紀など、打見る

ふ、あやみに神典を既云、神祕口傳の習ひ無て、
一枚も心得らぬ物あるを、彼漢籍を馴らむ
心づせに、讀て分らぬ物やハあると、ちひて打ふむ
りらこし、此書とを甚くたづむるを、多うるをバ
うらつけふ見らざし、見られけりて、彼、上卷に并へ
生等が加へし、拙きものし、却て目にほくの
なれば、終ふあはぬ方に見賤して、止む外をな
ける、故こゝに、さる人のためとして、昔よりた
たさぬ、神祕口訣を本として、一章毎に、其段の古意
旨を、惜まぬ説あらうと、そむく、古人は漢學せし

天皇乃御威徳を耀し、皇國の國體を張道の羽翼とな
るるあり、もや、さるると、先づ皇大御國の道と建
遠く異邦の書等迄も、涉獵するをり、今、世に
て、漢籍をむらん人も、然らざるを、あまほし
さて、此書、別凡例と云も、如し、歌ハちやく此紀
古事記を合せて、別釋し、此書ハ、凡て省
たり、即稜威、言別と名けて、此、俱ハ刊行に、故語
釋ハ、其言別、譲りて、省る處多うれど、彼書、三十年
以前、ふもの、これ、いつう忘れて、同じ、此、兩方
ふ出、も有べく、又、其釋言の、稀きは、此と、彼と、

詰チガへるもあつるまどきにあらん。ましあつるば。名む人其
宜きとえ〜び取ルべし。

天保十五年五月廿五日 橋守部長々 謹識

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 天保, 橋守, and 謹識.]

